

岡井 健(おかい・けん) 1943年、東京生まれ。高校卒業まで京都で暮らす。帯広畜産大学畜産学部獣医学科卒業。68年に獣医師になり、翌年には別海村農業共済組合へ就職。根室地区農業共済組合の6診療所を歩き、同組合事業部長も務めた。04年の定年退職後、岡井家畜診療所を開業。「畜産の形態が日本の食料事情に大きく関わっている」との視点から、社会に警鐘を鳴らす。著書に『ベスト・クリニック』(デーリイマン社)、『そりゃないよ獣医さん 酪農の現場から食と農を問う』(新風舎)など。ブログ「そりゃおかしいぜ 獣医さんの嘆き」(http://okaiken.blog.ocn.ne.jp/)で発信中。別海町在住。



連載第128回 「アニマルウェルフェア畜産」の今(その3)／特別インタビュー

45年間にわたり酪農の現場で診療を続ける別海町の獣医師

## 岡井 健さん

聴き手 ルポライター 滝川 康治

# 「乳牛にとって最大の苦痛は、 個体改良と穀物多給によって 泌乳を強制されていることだ」

家畜福祉(アニマルウェルフェア)の原則として「十分な餌を与える」「住環境がよい」「行動を制限しない」などが提唱されてきた。「それらは、いずれも外見的な要素。改良が進んだ乳牛に大量の穀物を与えて飼うと疾病が増え、かえって苦痛を与える」と指摘するのは、45年間にわたり道東の酪農の現場で「農と食」の変遷を見つめてきた、別海町の臨床獣医師・岡井健さんだ。EU(欧州連合)などの「家畜福祉」の5つの原則に、①一人あたりの飼養頭数の制限 ②穀物給与の上限を設ける ③乳価に差をつける――を加えるように提案する岡井さんに、現場の状況や提案の主旨などを聞いた。

(11月19日収録)



農業共済組合の診療所で「第四胃変位」の手術を行なう岡井さん(2005年撮影)

消えていく酪農の原風景と  
牛に対する農家の思い

――1968年に獣医師を始めたころ、臨床の現場はどんな状況だったのですか。

岡井 当時、乳牛の病気は、事故かそれに類するものしかありませんでした。足を怪我したとか乳熱になっただけとか、盗み食いしたというものです。(来道までの)1年半ほどは府県で診療していました。農協にいたので人工授精もやっていましたし、農家を総合的に見る目もその時に培ったのだと思います。

――まだ、飼養頭数が少なかった時代ですよ。

岡井 そのころ根室地方では、普通は10頭前後、年間4000キロ×20頭＝80トンの生乳を出荷するのが大きい酪農家でした。それでも府県に比べ5倍以上の頭数です。バケツトミルカーで搾り、目の前で個体の乳量を把握していた。手搾りの農家もありました。すごく乳が出た牛でも1日30キロ、輸送缶いっぱいにならないのです。配合飼料もほとんど与えません。疾病は乳熱や乳房炎が中心で、難産や怪我など不慮の事故

が圧倒的でした。

――家畜福祉の面から見た酪農について、基本的な考え方は？

岡井 畜産業のなかで、酪農は人と家畜が特異な関係を持っています。出生から育成、授精、分娩を経て搾乳となり、酪農家は毎日、搾乳や除糞、給餌などを欠かせません。乳質や繁殖、健康一般の管理を数年間くり返し、長い生涯を乳牛と共にします。繁殖用の豚や肉牛でも長時間の管理はありますが、搾乳や乳質の管理などはありません。酪農の原風景といえる、乳牛の個性に触れ、心情的な交流すら生じる飼養形態は、家畜福祉の概念を最も受け入れやすいものだと思います。

――僕の子ども時代は、牛や馬は家族の一員でしたね。

岡井 日本には、仏教の伝来以前から伝統的に動物を慈しむ風習がありました。まだ畜産業が存在しない時代にも、農民は使役牛馬のため、地域で馬頭さん(馬頭観音)や獣魂碑などを建立して、その魂を鎮め敬意、感謝していたものです。

かつては治療の最中に牛が死亡すると、一家総出で悲しみ、近所の農家が見舞いに集まって慰めましたね。

（自由化によって）年間10万トンだった牛肉の消費量が30万トンくらいまで増えました。国産牛は、仕上げの時期に殺物を大量に給与します。国産牛肉は「霜降り」と称される高級肉と位置づけ、安価な輸入牛肉と区別する形で生き残りました。自由化論者は「国産牛肉と輸入牛肉の棲み分けができる」と言いますが、その背景には円高があったのです。



十勝管内で見かけた畜魂碑。農家の庭先や牧場の一角で家畜に謝意を表す

そうした家畜への感謝の気持ちは、最近はずっかり薄れてしまいました。それでも今なお、牛舎の近くに畜魂碑などを建てている酪農家がいるのが救いです。畜産の盛んな地域の集会場などには、必ず畜魂碑があると思います。

**自由化で個体価格が暴落  
多頭・高泌乳化に転換へ**

取材先の浜中町や芽室町などで畜魂碑を見たことがあります。家畜に対する感謝の念が薄らいでいく

赤字になったほどです。

全体の3割ほどを占めていた個体販売の収入がなくなつたに等しいので、酪農家は搾ることに専念し始めました。農業共済連合会や農業改良普及センターもそうした指導に変わった。生乳は検査するけれど、乳牛は見ないようになり、乳量だけで見られるようになっていくわけです。

——生産量を上げるために、飼養頭数を増やし、配合飼料（穀物）の給与量も増えていった、と。

**岡井** 牛肉自由化の少し後に進化したのが円高です。15年間ほどで1ドル120円が4割ほど円高になり、穀物が安く手に入るようになった。この間に世界の穀物価格が上昇しているも、酪農家は実感することもありませんでした。

のは、いつころからですか。

**岡井** 90年に始まる牛肉とオレンジの自由化は、酪農家に大きな転換をもたらします。淘汰する牛の個体価格は暴落し、病牛に限らず、少々問題のある牛は屠場への搬入がほとんどなくなりました。それまでは、少し調子の悪い牛でも10数万円、肥らせて計画的に廃用すると40万円前後になっていったんです。リターンがあるから、酪農家は一生懸命に牛を可愛がっていましたね。もう駄目になる牛でも、抗生物質の使用に伴う屠場への出荷制限が切れるまで、誰もが懸命な看護をやってくれた。

特に大型の酪農家は自由化以降、手厚い看護を怠るようになり、経済的な価値が著しく下がった牛に手間や治療費をかけなくなった。十分な看病さえすれば助かる個体も、いとも簡単に廃用にしてしまう、と。

——牛肉の自由化が酪農経営にもたらした影響は？

**岡井** 酪農家の経済を支える2本柱は個体販売と乳代でした。しかし、自由化以降はその片方が崩れ、乳代収入に重きを移すことになった。指導機関も、泌乳量のアップのための技術の紹介や、機械や設備の話ばかり

りになっていきました。

とにかく個体価格の暴落が大きかったんです。自由化後の半年くらいの間に値段がガクンと下り、瘦せた牛を屠場に出すと2万円くらいにしかならない。だから、腰抜けや乳房炎で起立できなかつたり、病気で駄目だろうという目安がついたら、農家は診療の継続を望まなくなりました。

高泌乳の牛群の消耗は激しく、今では大型農家では2・5産しかしません。牛群の3割以上が常時、初産になってしまいました。農家と牛の付き合える時間が短縮されたのです。頭数が増えることで、毎日の接触もさらに希薄になる、と。群れとしての落ち着きもなくなりました。

——大きな変貌ですよ。

**岡井** かつての牛との日々の営みが、急速に失せていきます。農場周辺の風景も、無機質な牛舎にとつて変わり、コンクリートの上をソロソロ歩く牛たち。農場は大型機械が往來する工場の様相を呈してきました。牧草地に牛を出すこともなくなった。一般の人が持つ酪農のイメージが大きく変わってしまったのです。

——臨床現場でそうした変化を見



酪農の現場から社会に警鐘を鳴らし続ける岡井さん

**大型酪農家が抱える問題と  
乳牛に与える苦痛について**

——近年、酪農地帯を車で走ると、大きなフリーストール牛舎（繫留しない方式の牛舎）が増えてきた。工場型畜産を象徴するような風景です。

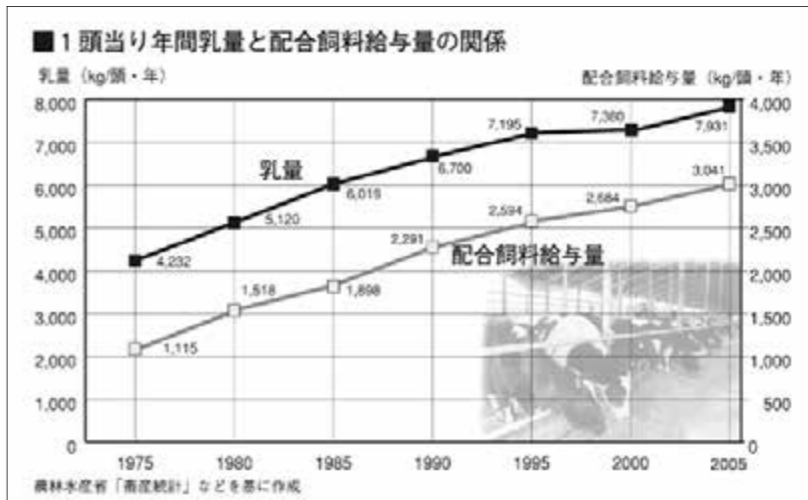
**岡井** 搾乳牛150頭ほどのフリーストール牛舎を建てた場合、新たに導入する牛まで入れると1億円ほどの資金が必要になる。自己資金で全額を賄える人はいないでしょう。推測ですが、通常の酪農家は制度資金も含め7割程度は、関係機関に依存することになります。酪農家の思いとは裏腹に、7千万円の負債は飼養形態を大きく変えていきます。

飼料は、数センチに刻んだ粗飼料（牧草など）に配合飼料（輸入穀物を混ぜ、微量成分などを混入させて給与するTMR（Total Mixed Ration）混合飼料）となりました。牛が休息したりするベッドは自由に選択できます。フリーストール方式は、飢餓や拘束には無関係ですが、家畜福祉の概念に沿った飼養形態かといえ

ば、全く違います。

——もう少し詳しく説明を。

**岡井** 通常は、泌乳ステージによって、「分娩後4カ月以内の泌乳前期」「妊娠後の泌乳後期」「分娩が近い若牛と乾乳期」の3群に分け、それぞれに合わせたTMRを給与します。泌乳前期には、1日15キロ近い穀物



配合飼料の給与量に比例して、右肩上がりに1頭あたり乳量が増えた

てきた、と。

**岡井** 農業共済事業でいうと、現在は事故で乳牛を廃用扱いにする割合は平均5・5%程度ですが、以前は2〜3%でした。牛肉の自由化以降、根室管内の9診療所のうち、廃用扱いが一番多いところは12%、全体でもいきなり8%前後になった。自由化後の2年間は、(家畜共済事業が)北海道全体で460億円くらい

を与えるのです。平均乳量は9千キロ近くなります。こうして、150頭の牛群は1200トン近くを生産し、年間の乳代は投資額に等しい1億円ほど。外部資本に大きく依存する飼養形態は、この程度の収入があれば経営が成り立ちません。

——そうした飼養形態を家畜福祉の面から捉えると？

**岡井** EU(欧州連合)は家畜福祉に配慮することで、畜産物の品質が向上すると主張しています。家畜福祉の考え方として「十分な餌を与える」「住環境がよい」「健康である」「行動を制限しない」といった原則を挙げていますが、いずれも外見の要素です。これらが改善されると、乳牛は苦痛から解放され、生命ある個体として扱われことになるのか。家畜福祉の根本理念に沿った飼養管理といえるのでしょうか。大変疑問に感じています。

設備投資を行ない、十分すぎる餌を与え、フリーストールでTMRを給餌している酪農家は、発病しない範囲で牛を追い詰めることで、最も収益の高い地点を求めているのです。経営のいい、出荷乳量が多いところほど、そうした状態の牛群といえます。

改良が進んだ乳牛を十分な飼養環境で飼育することが、かえって乳牛に苦痛を与える現象も起きています。難解な飼料計算どおり与えると、それに伴う自動給餌機械や高価な添加物(サプリメント)など多額な経費が必要でシステムが待ち受けています。これらを多大な資金投入と労力で成し遂げると、乳牛は泌乳量を上げることで応えてくれる。乳牛には大きな負担となり、さまざまな疾病を発生させることにもなります。



牧草など粗飼料と配合飼料を混ぜるTMRミキサー

改良が進んだ乳牛を十分な飼養環境で飼育することが、かえって乳牛に苦痛を与える現象も起きています。難解な飼料計算どおり与えると、それに伴う自動給餌機械や高価な添加物(サプリメント)など多額な経費が必要でシステムが待ち受けています。これらを多大な資金投入と労力で成し遂げると、乳牛は泌乳量を上げることで応えてくれる。乳牛には大きな負担となり、さまざまな疾病を発生させることにもなります。

### 穀物の多給がもたらす乳牛の病気と臨床現場の実態は

——臨床現場では、どんな疾病が増えているんですか。

**岡井** ミネラル代謝に起因する起立不能や、脂肪肝などの代謝器病、消化器をめぐる第四胃変位などは、穀物を主体にした十分すぎる飼料の給与に起因するものです。高能力牛では、これらすべてが治り難く、長期で高額な治療をしなければなりません。病状の判然としない牛は、体温計と聴診器では容易に判断できず、血液検査をしなければ的確な診療方針が立てられない状況です。現代の高能力牛にとって最も苦痛なことは、見た目の憐れさよりも、個体改良によって泌乳を強制されていることではないかと思えます。

——穀物の多給と脂肪肝の関係について、分かりやすく説明を。

**岡井** 日本では毎年、2000万トンをやや下回る輸入穀物を家畜が食べています。ほとんどがアメリカ産です。牛は好んで食べますが、自然界では穀物を食べることはほとんどありません。高エネルギーの穀物を大量に取り

込むことで、一生懸命働くのは肝臓です。高泌乳の牛は、分娩後の泌乳に備えるために乾乳期に肝臓に溜まった脂肪が、処理能力の範囲を超えて蓄積され、脂肪肝となるのです。フォアグラ状態といえます。

代謝のかなめになる肝臓が機能しなくなれば、多様な疾患の引き金になります。ケトージス(注)Ⅱ血液中のケトン体の濃度が上がっている病態や起立不能、大腸菌性乳房炎の発生につながります。第四胃変位の牛の多くも脂肪肝になっています。

——その「第四胃変位」が増えていますね。

**岡井** 牛には胃が4つありますが、第四胃は人間の胃と同じ働きをしています。この病気は、分娩直後に罹ることが多く、第四胃の弛緩が先行して発生します。原因は泌乳のストレス以外の何ものでもありません。わたしたち人間などの単胃動物も、ストレスは胃が受けます。

根室管内では、大型農家の初産牛の30%、2・5産の牛群のほぼ半数は、第四胃変位の手術を受けていると言っているでしょう。四胃潰瘍も珍しくありませんが、時には胃に穴が開いている症例(胃穿孔)も、手

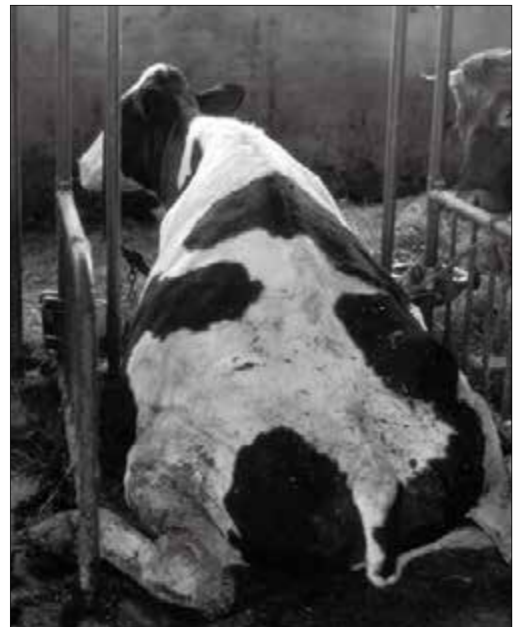
長させることが多いのです。こうした飼育の多くは、粗飼料を抑えた育成方法となります。大量の穀物を与えられた牛の成長は見た目にはいいのですが、ポツチャリ型で胃や肝臓などの弱い牛になる。抵抗力のない乳牛になり、結果的に短命にすることもつながっていきます。

——個体の改良も乳牛に苦痛を与えています。

**岡井** 近年の乳牛は、食べたもの以上に泌乳するように改良されています。分娩後、病気で全く食べられない状態になっても、自らの身体を削って日量40キロくらいは平気で泌乳する牛もいます。そこで治療すると、病状は改善されなくても、点滴

した栄養が泌乳を促進し、さらに病状が悪化することもあります。

通常の牛では、分娩後100日ではほぼ100キロ痩せます。それを250日ほどで、妊娠による胎児の成長などで100キロと、自らの体重100キロを回復し

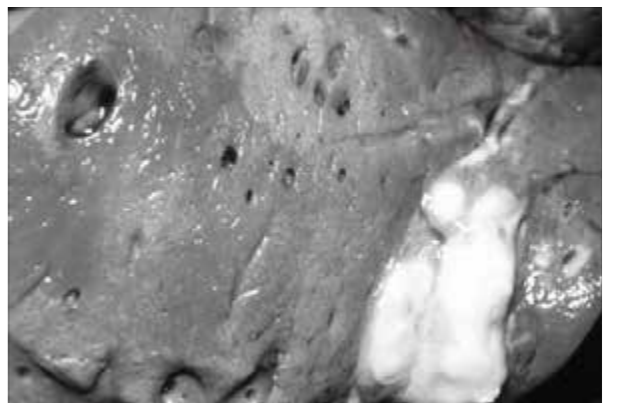


起立不能になった乳牛(提供/岡井健)

ていくことになる。(年間泌乳量が)1万キロを超える牛は150キロも体重が増減します。初産牛では、自らの成長として、さらに100キロほどを見込まなくてはなりません。

最近推奨されている分娩間隔を短くすると、こうした負担をさらに強いることにつながります。高生産牛は、体力を回復する機会が極端に短くなっているのです。

——飼養頭数が多いと、個々の牛の状態は見えづらくなりますね。  
**岡井** 多頭化で個体管理が疎かになり、酪農家の監視の目が行き届かなくなりしました。これまでは、「食欲がない」という診療依頼が多くあり、餌槽を見て酪農家が簡単に個体の状



脂肪肝になった乳牛の肝臓。膿瘍もできている(提供/岡井健)

術中や死亡後の解剖で見つけることがあります。

——以前、家畜診療所で第四胃変位の手術の様子を見学しました。

**岡井** 大きな共済組合の診療所では午後になると、4〜5頭の手術をします。獣医師も慣れてしまい、技術がすごく向上しました。根室地区農業共済組合では、第四胃変位の手術だけでも年間7〜8千頭、技術料は4〜5億円の収入になります。高生産を上げること、獣医師集団も収入が増えていくわけです。

——他の疾病はどうですか？

**岡井** 消耗性疾患とされる態を判別できた。しかし、フリーストール牛舎では、それがほとんどできません。食欲が落ちてかなり時間が経って異常を発見し、「乳量が減った」「乳の張りがよくない」などと診療依頼をするのです。発見されるまで、乳牛はひたすら病気の苦痛に耐えていることになりました。

また、フリーストールの床はコンクリートで、いつも湿った状態です。牛は走れないし、滑走に怯えながら、軟らかい蹄で硬いコンクリートの上を歩くこととなります。湿った硬い床は最悪の条件であり、乳牛は自由に歩けない苦痛を感じています。通常のフリーストールでは、年に2・5回の削蹄が必要となります。放牧牛では、蹄が自然に摩耗し成長します。牛は目に見えない苦痛を、コンクリートの床で感じているのです。

——一方で、放牧を基本にした、家畜福祉にも適った酪農を営む人たちもいます。

**岡井** 十勝管内では、足寄町の放牧酪農研究会の活動が広がりを見せています。根室管内から広がった「マイペース酪農」の集まりも毎月続いている。牛群を大きくせず、乳牛にも草地にも負荷をかけず、自分た

——では、誰が家畜福祉を担うと  
いいのかが。——

す。生産性を落とすことに積極的な  
農家はいません。家畜福祉の規定を  
順守する酪農家を守るために、有機  
農産物に対するEUの価格補償と同  
じような制度を導入し、乳価に差を  
つけるべきです。EUの「Welfare  
Quality」家畜福祉品質」を参考に  
した評価基準を創り、家畜福祉に配  
慮した農家の乳価に反映させる、と。  
そうしないと酪農家の協力は得られ  
ないし、家畜福祉の広がりは画餅に  
帰ってしまう危険性さえあります。

### 農家経済まで視野に入れた 家畜福祉の評価表を創ろう

岡井 政治や行政が飼養頭数や穀  
物給与量を制限する制度をつくり、  
きちんとした牛の飼い方をしている  
酪農家の乳価を高くするといひ。オ  
ランダの制度は、家畜福祉というよ  
り有機農業のシステムをそのまま酪  
農に応用し、乳代が3割くらい高く  
なっています。乳価が高ければ、1  
00頭搾っている農家も「4分の1  
くらいなら減らしてもいい」となる。  
家畜福祉の研究者も、もっと幅広く、  
具体的に農家の経済まで及ぶ形で対  
応しないといけない。

——行政は放牧酪農の推進を唱  
え、道農政部は指針も作ったが。

岡井 でも、現場では乾乳中の牛  
や育成牛を放牧地に出し、(役所に申



乳牛を放牧し、家畜福祉にも適った酪農を営む  
(足寄町の「ありがとう牧場」で)

解決の糸口になるのでは。

岡井 NHKの朝の番組で那須高  
原の牛乳を取り上げたことがあった  
のですが、フリーストール牛舎の中

請する際の)写真を撮っている。放  
牧酪農に対する制度ははずなのに、  
補助金ほしさにやっていた。今は  
「何日放牧したか」を書きようになり  
ましたが、中標津町では、きちんと  
と放牧をしている酪農家は10%くら  
いですが、40頭前後しか搾っていな  
いので、出荷量は3~5%でしょう。  
片方は2、300頭搾っていて、し  
かも高泌乳ですからね(笑)。北海道  
牛乳には必ず放牧の絵が描いてあり  
ますが、あれは偽装です。

——そうした偽装写真のことも含  
め、家畜福祉について、消費者には  
何を考えてほしいか。

岡井 畜産の世界は、普通の農産  
物と違って、乳牛や鶏そのものを売  
るわけではありません。家畜の生  
産物を売るわけです。牛乳の場合  
は、個体や生産農家が違っても混乳  
し、分からなくなってしまう。だか  
ら、飼養形態そのものを評価するシ  
ステムを創らなければ、家畜福祉商  
品を普及していくことは難しい。

で中国産の草や配合飼料を食べさせ  
ていた。リポーターが「那須の牛乳  
はうまい！」と言ったけれど、全部  
違うと思います。

——飼い方と同時に、飼料のこと  
も評価する目を養ってほしい、と？

岡井 消費者が商品を見て分かる、  
ということは難しいでしょうね。結  
局、専門家の人たちが「家畜福祉」の  
フィルターをかけ、農場ごとの評価  
表を作るしかないんじゃないか。そ  
の評価によって乳価を決めるのは、  
大変なことですよ。



第四胃変位が進行し、胃に穴が開くケースも(提供/岡井健)

収益にすることが可能です。数少な  
くなくなった酪農の原風景を守る人た  
ち、家畜福祉のあり方のヒントを見  
ることが出来ます。

### 穀物給与や飼養頭数の制限 と乳価に差をつける政策を

——現在の酪農の現場では、家畜  
福祉をどう捉えていますか。

岡井 日本の農業は、TPP(環  
太平洋連携協定)に参入し、食料自  
給率に無関心な国家にふさわしく、  
衰退の一途をたどっているかに見え  
ます。国は、ほとんど唯一の選択と  
して規模拡大を押し付け、少なく  
なった農家は生き残りのため、生産  
効率を上げることに懸命です。そう  
した環境のなかで、家畜福祉の概念  
はにわかには受け入れられない現状  
にあります。

ほとんどの場合で、家畜福祉は生  
産効率と概念が対峙します。家畜を  
命ある生き物としてではなく、泌乳  
能力を目的に個体改良し、餌の給与  
方法や牛舎の構造を改善する過程で、  
乳牛を無機質な生産機械としてきた  
歴史がある。そうしなければ多頭化  
や高泌乳は成し遂げられません。家  
畜福祉の考え方は、それを否定する



フリーストール牛舎の床は湿って硬く、牛の蹄を傷めるこ  
ともある

ことにもなり、酪農家や周辺産業の  
理解には時間がかかると思います。

——では、どうすればいいか。

岡井 EUからの提案に加え、「飼  
養者あたりの頭数制限」穀物給与の  
上限を設ける「乳価に価格差をつけ  
る」の3点を追加する。それを追求  
することで、酪農家が家畜福祉に取  
り組みやすくなり、より健全な方向  
に持っていけるでしょう。

ベッド数の上限がありますね。同様  
のことが酪農業でもできないでしょ  
うか。成人1人あたり30頭以上の成  
牛を飼養すると、どこかで必ず乳牛  
に負担をかけます。家畜福祉への配  
慮から、夫婦で成牛60頭以上の飼養  
を制限するべきです。

——家畜の健康にとって、穀物給  
与を減らすことも欠かせませんね。

岡井 全道平均で1頭あたり年間  
2・6トンほどの穀物を与えていま  
すが、これを1トンまでに制限する。  
今の家畜福祉の概念にはないもので  
すが、多くの問題を解決でき、乳牛  
を苦痛から救えます。人間の食べも  
のと競合する穀物の給与量を抑える  
ことで、世界的な食糧問題や畜産の  
糞尿問題に対し、解決の糸口を与え  
ることもなります。穀物に代わり、  
粗飼料を十分に与えることで、乳牛  
への多くのストレスは大きく改善さ  
れます。国内の遊休農地などの活用  
にもつながっていくでしょう。